

# 『ソフィーの世界』のマルクス

岩 淵 慶 一

## はじめに

ヨースタイン・ゴルデルというノルウェイ人が書いた『ソフィーの世界』が世界中で信じられないほどの売れ行きを示している。日本でもその翻訳が一九九五年の六月末に出されてから半年ほどしか経たないのに早くも一二〇万部近くも発行されたというのであるから、これは本当に驚異的である。おそらくその理由は、訳者のあとがきにも書かれているように、全体が実によくできた物語になっていること、しかも哲学の歴史がなかなか本格的に、それでいて生き生きと、理解しやすく説かれていることなどにもとめられるであろう。しかしまた、次のような問題も忘れられてはならないのではないか。それは、哲学関係の文献が増大しているおかげで、今日では誰もが哲学史についての知識を豊富にもつようになってきているが、しかしそうした知識から一つの全体像を創り出すのが難しいために、しばしばせっかくの知識がばらばらのままで放っておかれ、その結果しばらくするとそれらの知識が蒸気のように蒸発してしまうことである。こうした状況のなかで『ソフィーの世界』は、長期にわたる内容豊かな哲学の歴史についてのそれなりの一つの全体像を提供している。こうした点も、その魅力の一つになっていることは疑いない。

さて、さらにその他のさまざまな理由もあって驚異的なベストセラーになっている『ソフィーの世界』について、さしあたってここで注意しておきたいのは、その発行部数の量のもつ意味である。日本哲学会の会員数の数百倍にも上る数の読者が存在しているということになれば、良きにせよ悪しきにせよ、この一冊の本はかなり強力な磁場を形成し、この磁場に哲学的教養のスタンダードが

引き寄せられることになる。もしもその通りであるとすれば、何らかの哲学的なテーマについて論じたいときには、この本から出発すれば、読者とのある程度の共通の前提がえられるということになるのではないか。そうした期待をもって、さっそくこの本のマルクスについての説明を取り上げることから、筆者も議論を始めることにしたい。実は、ここにはマルクスの思想の理解をめぐるきわめて重要な問題がふくまれているのである。この問題は、同書にみられるその他の諸問題、例えば、アリストテレスの節で彼の性差別主義については触れられていても、彼が自らの心の疚しさを癒すために捻出した奴隷制弁護論についてはまったく語られていないというような問題などと比べても、はるかに大きな問題なのである。

—

『ソフィーの世界』の「マルクス」の節には、ディケンズの『クリスマス・キャロル』やアンデルセンの『マッチ売りの少女』を利用した印象的な導入部——どういうわけかマッチ売りの少女が突然女性革命家に変身し、放火して、「知らなかったの、私は共産主義者なのよ」といたずらっぽく笑う——があって、読者は滑らかにマルクスとマルクス主義の世界に導かれる。そして、そこで短いながらもなかなか明快な解説が与えられていて、ともかくもマルクス主義の全体像が得られるようになっていく。したがって、ここでも評判の著者ゴルデルの並々ならぬ力量に感心させられるのであるが、しかし、著者によって対話形式で展開される議論にすこしでも立ち入って見るならば、さまざまな問題があることに気づかざるをえない。とりわけマルクスの疎外論についての解説にはなかなか優れたコメントとともに看過しえない問題も含まれていることがわかる。

ゴルデルはマルクスの疎外論にかかわる議論を、主人公の一人で彼の分身のごとき哲学者アルベルトに、まず最初に、「共産主義者になる前の若い頃、マルクスは、働く人間に何が起きているのか、ということに興味をもった」と語らせるところから始めている。「働く人間に何が起きているのか」、これはマルクスが、これこそ問題だと考えたものをまことにびったりと言いついて、さすがに『ソフィーの世界』と関心せざるをえない。たしかにここで「共産主義者になる前の若い頃」と書かれている点には問題が含まれているが、しかしその点については後で論ずることにして、まずは著者の議論を追ってみることにしよう。彼はアルベルトに、マルクスの問題意識が何であったかを述べさせた後に、さらに彼に、かなり問題のある仕方ではあるが、ともかくもヘーゲルに引き

寄せながらマルクスにおける労働の概念とその意義について論じさせている。そして、著者はアルベルトに、ヘーゲルとマルクスが「労働は『人間であること』と密接に結び付いている」ということを見出だしたと指摘させ、続けてアルベルトとソフィーの対話をつぎのように描き出している。

「資本主義のシステムでは、労働者は誰か他の人の利益のために働く。働けば働くほど、その他人が得をするシステムなんだ。すると、労働は労働者自身から抜け出して、労働者のものではなくなくなってしまふ。労働者は自分の労働からへだてられてしまふんだ。さらには、気持ちの上で自分自身からもへだてられてしまつて、労働者は人間であることのプライドを失う。マルクスはこういうことに、『疎外』というヘーゲルの用語をあてはめた。」

「わたしには、二〇年以上も工場でチョコレートの箱詰めをしている叔母さんがいるんだけど、アルベルトの言うこと、とてもよくわかる。叔母さんは、ほとんど毎朝、仕事なんかうんざりって思うんですって。」

「叔母さんが仕事にうんざりしているとしたら、ソフィー、どこかで自分にもうんざりしているのだ。」  
「とにかく、チョコレートはうんざりだ<sup>(1)</sup>って。」

こうした会話の後にアルベルトは、資本主義社会では労働者がブルジョア階級の奴隷となっているだけではなく、さらに「人間としての存在をそっくり明け渡してしまっている」という総括をし、「人間の高貴のしるしであるはずの労働が、労働者を動物にしてしまったんだ」という結論が引き出している。アルベルトは、労働についてのマルクスの議論をヘーゲルに近付けて解釈しているが、ここで取り上げられている議論が、一八四四年の夏にマルクスによって書かれた『経済学・哲学草稿』のなかでおこなわれているものであることは明白である。この草稿のなかでたしかにマルクスが「働く人間に何が起こっているのか」という問題を提起していることとみなすことができるし、そこで実際に彼はアルベルトがレクチャーし、ソフィーが叔母のことを思い出しつつ納得した議論を展開しているのである。アルベルトが簡潔に語っているように、マルクスが提起していた問題にたいする彼自身の解答は、要するに、資本主義的な生産様式においては、何よりも先ず、労働者の労働が疎外されているということであったのである。

しかし「疎外」などという言葉が登場してくると、どうしても議論が抽象的なものになりがちであることことを考えて、著者はソ

フィーにすかさず議論を彼女の叔母の話に移させている。ゴルデルが問題の良き理解者であることを示していて興味深い。これによって、議論されているのが、人を雇って使っているのではなく、雇われて働いている人たちであれば誰もがいたところで経験している問題であることが、はっきりさせられている。

ソフィーの叔母のように働いている人たちの一日を思い浮かべてみよう。彼あるいは彼女にとっても一日は二四時間しかなく、どのように生きていくかということは、この二四時間をどのように過ごしているかということにほかならない。そして、まことにわが国の古典に語られているように、人は誰であれ「一日のうち飲食、便利、睡眠、言語、行歩、やむ事をえずして多くの時を失う」(『徒然草』第一〇八段)のである。まして、現代の都市やその近郊で働いている者にはそのうえに、工場、オフィス、役所、商店等々での仕事のために彼あるいは彼女の最大のエネルギーが発揮される長い時間帯があり、さらにさまざまな交通機関を利用して仕事が行われる場所へ移動するただけにも少なからぬ時を失わざるをえない。したがって、働いている彼あるいは彼女がいかに生きているかは、何よりも先ず、まさしく彼あるいは彼女が働いている時間(とのために費やされるその前後の時間)をどのように過ごしているかにかかっているといっても過言ではない。したがって、要するに、マルクスが提起していた「働く人間に何が起きているか」という問題は、働いている彼あるいは彼女がいかに生きているかという問題であり、つまりは、彼あるいは彼女が働いている時間をいかに過ごしているかという問題であったのである。この問題はまた、『ソフィーの世界』の基本テーマと関連させて言い換えるならば、要するに、働いている彼あるいは彼女に提起される「あなたは誰？」にいかにか答えるかという問題にはかならない。

では、資本主義的な生産の仕方が採用されている社会で雇用されて働いている彼あるいは彼女は、まさにその働いている時間をいかに生きているのか。「働く人間に何が起きているのか」。先ず最初に、チョコレート工場で働いているソフィーの叔母のところではどうであるのか。ソフィーによれば、この叔母は彼女の仕事にいそいそと出掛けるのではなく、毎朝仕事なんかうんざりだと思っているし、彼女が箱に詰めるチョコレートもうんざりだと思っている。この「うんざり」には二〇年以上も働いてきた女性労働者の万感が込められていることは、改めて指摘までもないであろう。つまり彼女は彼女の労働にも、彼女の労働が実現される諸条件にも、彼女の労働の成果にもうんざりしている、つまりは飽きて嫌になってしまっているのである。この話をソフィーがすると、さっそくアルベルトは、そのようにうんざりだと思っている叔母は自分自身にたいしてもどこかでうんざりしているのではないか、と口を合さんでいる。一日二四時間中に占める労働時間がどの程度のものであれ——仕事のために必要な前後の時間も入れれば、相当な量に

なるはずである——、その間彼女が仕事にも自分にもうんざりしているのであるとすれば、その間彼女は良く生きている、適切な生を生きているといえるであろうか。この問いにたいする答えははっきりしていて、到底肯定的なものではありえない。そして、もしその通りであるとすれば、結局、彼女は彼女の一日を、つまりは彼女の人生を、良く生きているとは到底いえないということになるであろう。しかし、もしその通りであるとすれば、これはまことに深刻な由々しい問題ではないであろうか。そして、こうしたソフィーの叔母が直面している問題は彼女一人のものではなく、彼女のように、労働の諸条件から切り離されていて雇用されなければ生きて行けないあらゆる人々がいたるところで直面してきたし、また現に直面している問題なのではないか。

では、何故働いている人間のところでそうした問題が起きてきたし、また現に起きているのか。この問題にたいする答えが、先のアルベルトの議論によって与えられていたということになる。彼の考えでは、ソフィーの叔母のような状態に置かれている労働者は資本主義システムにおいてはありふれているのであって、それはこのシステムにあっては労働者が自分の労働からへだてられ、さらに気持のうえでも自分自身からへだてられ、人間であることのプライドを失ってしまったことの結果にはかならないのである。アルベルトの考えでは、こうしたことをマルクスは「疎外」という言葉で言い表したのである。そこで、この言葉を用いるならば、労働者が自分の労働にも、さらには自分自身にもうんざりだと感じるにいたるのは、彼の労働が疎外されているからなのである。

さて、ここまで来れば、当然、そもそもこの「疎外」がどこから生じてくるのか、さらに問われることになる。この問題についてのアルベルトの解答は、すでに先の引用文のなかに与えられていたように、「資本主義的システム」なのである。そして、彼はこのシステムの特徴について次のように述べている。すなわち「資本主義社会は、労働者が事実上他の社会階級の奴隷となるように組織されている。労働者はブルジョアに労働力を差し出すだけではなく、人間としての存在をそっくり明け渡してしまうのだ。」<sup>(2)</sup>こうした説明が、資本主義的システムが賃金奴隷制であることを強調している限りでは間違っているわけではないが、しかし、このシステムを古代の奴隷制などの対比において適切に把握させるものではないことも明らかである。しかし、ここではそうした問題のところまで立ち止まるべきではないであろう。

さしあたって、ここまでで確認できるのは、アルベルトが、つまりは『ソフィーの世界』の著者がマルクスについて次のように考えているということである。すなわち、マルクスが、働く人間たちのところで彼らの労働が疎外されていて、その結果として彼らが自分自身についてまでも本当にうんざりだと思おうというようなことが起きているとみなし、まさにそこに資本主義的システムのもつ

とも根本的な問題があると考えていたということである。実際に『経済学・哲学草稿』を読めば、こうした解釈が、細かいところとはともかくとして基本的には適切なものであるということがよくわかる。マルクスは、疎外された労働——その結果として人間は彼の人間の本質を疎外され、さらには他の人間からも疎外される——にまさに資本主義の諸悪の根源があるとみなし、その産物としての私的所有の積極的止揚として彼の共産主義の構想を提起していたのである。『ソフィーの世界』の著者はこのようなマルクスの疎外論とその意義を、ソフィーの叔母のチョコレート労働者をイメージさせることなどで、いっそう適切に理解できるものにしていく。したがって、そのかぎりでは彼は、マルクスの疎外論の良き理解を広めるといふ点でも貢献していることになるであろう。

しかし、それにもかかわらず、はたして彼はこのマルクスの理論にたいして十分に適切な態度をとっているとみなすことができるであろうか。実は、『ソフィーの世界』の「マルクス」の節を丁寧に読んでみると、この問いにたいして肯定的な答えをあたえることはとてもできないということがわかってくるのである。

先に見てきたように、哲学者のアルベルトは、マルクスが「働く人間に何が起っているか」という問題を提起して、疎外された労働について論じたのは「共産主義者になる前の若い頃」であったと述べている。もしもこの「共産主義者」をマルクスの意味で受け取るならば、この主張はまったく間違っているのである。たしかにマルクスが厳密に何時から彼の意味での共産主義に移行したかについてはさまざまな見解がある。しかし、一八四三年の秋から書き始めた論文の中ですでに労働の疎外にも触れていたマルクスが初めて働く人間の問題を本格的に提起し、徹底的な検討を加えたのが一八四四年に書かれた『経済学・哲学草稿』においてであることも、そしてまたこの草稿で彼が私的所有の止揚としての共産主義についての彼の独自の構想を本格的に提起していたことも、疑いの余地がない。したがって、マルクスが労働の疎外の問題に関心を持ったのは「共産主義者になる前の若い頃」であったという見解は完全に間違っているといわなければならないのである。

しかし、それにしても、この程度のことには『経済学・哲学草稿』に目を通してみれば、文字通り一目瞭然のはずである。この一目瞭然のことを知らなかったとすれば、アルベルトも、つまりは『ソフィーの世界』の著者もこのマルクスの著作を読まないで、マルクスについて語っていたということになる。おそらくここに現今のヨーロッパの知識人の世界における『経済学・哲学草稿』の価値低落とマルクスについての初歩的な教養の欠如が反映されているとみなすこともできるであろう。しかし、これではあまりにもアルベルトが気の毒なので、やはり彼も、つまりゴルデルも『経済学・哲学草稿』を読んだうえで、敢えて「共産主義者になる前の若い

頃」についての議論をしていたみなして先に進ことにしよう。もしもその通りであるとすれば、では、いったいアルベルトは「共産主義者」のもとに何を考えていたのか。この問いにたいする答えは、彼の議論の少し前の方の箇所を目を向けて行ってみると、自ずから得られることがわかってくる。そこでアルベルトは「マルクスにちなんで『マルクス主義』と呼ばれているものとマルクス自身の思想は分けて考える必要がある」と主張し、マルクスが「ときどき、自分はマルクス主義者ではないと言いつ張ったそうだ」と付け加えながらも、「マルクスは一八四五年に『マルクス主義者』になった」と述べている。<sup>(3)</sup>アルベルトがマルクスについてもそれなりの素養をもって語っていたとすれば、そして、それなりに首尾一貫した議論をしていたとすれば、要するに、彼は先の「共産主義者」を、ここで登場してきた「マルクス主義者」と同義のものとして使っていたのである。

したがってまた、ここからはっきりしてきたことは、アルベルトが、マルクスが疎外論を説き、労働者の人間としてのプライドについて論じていたのは、一八四五年以前の「マルクスがまだ「マルクス主義者」に、つまり本来の共産主義者になっていない時期においてであって、一八四五年以後の「マルクス主義者」としてのマルクス、共産主義者としてのマルクスは違った考え方を採用するにいったつと——もちろん、留保条件つきではあるが——みなしていたということである。おそらくこうしたこと、「マルクス」の節の後半でアルベルトが、マルクスが「資本主義は理性にコントロールされていない自滅の経済システムだ」ということを証明しようとして、つまり資本主義の崩壊が歴史の必然性であることを証明しようとして説明していることは無関係ではない。

要するに、アルベルトは、つまり『ソフィーの世界』の著者は、マルクスの疎外論をそれなりに適切に把握し、しかもなかなか魅力的に描き出しながら、それにもかかわらず、結局のところ、そうした疎外論は初期のマルクスのものであって、一八四五年以後の後期のマルクスはそれを放棄し、歴史の必然的発展の理論に関心をもつにいったつと考えているのである。では、いったい何故ゴルドルはこのように考えるにいったつたのであろうか。ここで読者は、近頃では必ずしも周知の問題とはいえなくなってきたようであるが、マルクス解釈におけるきわめて重要な問題に直面したのである。

この問題をめぐる論争の歴史は、一八四四年夏に書かれたマルクスの『経済学・哲学草稿』が初めて公開された一九三二年から始まる。その前後のマルクスの初期の諸著作とともにこの未完の草稿が刊行されたおかげで、それ以前のマルクス主義者たち——ここにはカウツキーやベルンシュタイン、プレハーノフ、レーニン、グラムシなどはいっている——がほとんどまったく注目してこなかった疎外論を中心とする初期のマルクスの思想が初めて見出されたのである。そこで、それまでに形成され発展させられてきた伝統的なマルクス主義と新たに発見されたマルクスの思想との関係をめぐって議論が行われるようになったのであるが、この問題はしばしば、伝統的マルクス主義の中核をなしているとされてきたマルクス、すなわち『資本論』などを書いた後期マルクスと初期のマルクスの関係をどのようみるべきかという仕方提起されてきた。そしてこの問題にたいする解答のうちで最も影響力が大きかったのは、疎外論に象徴される初期マルクスの思想は後期マルクスによって放棄されてしまったというもので、最近にいたるまでソ連や東欧諸国の、さらに欧米や日本の新旧のスターリン主義の信奉者たちによって、それからまたこのスターリン主義の多少洗練された諸形態の擁護者たちによって大声で合唱されてきた。

ここで何よりも先ず思い起こすべきは、マルクスの『経済学・哲学草稿』が発表された一九三二年は、すでにスターリン時代にはいつていたソ連でスターリンがイデオロギーの領域でも権威を確立した時期であったということである。これによってマルクス主義の歴史においてスターリン主義が支配する時代がはじまったのであるが、それは伝統的なマルクス主義をカリカチュア化したもので、そもそもマルクスの疎外論とは原理的に相容れなかった。そこでこのイデオロギーの信奉者たちは、最初のうちは疎外論にたいして必ずしも一枚岩的に対応したわけではなかったが、しかし時とともにはっきりと、マルクスは彼の初期の疎外論を放棄したのだとみなすようになってきた。そして、そうした見解は、スターリンの死、さらに彼の権威の失墜の後も、スターリン亡き後のスターリン主義、すなわち新スターリン主義とともに生き延びさせられ、ソ連や東欧諸国、中国やヴェトナム、さらには資本主義諸国の社会主義運動のなかで圧倒的な影響力を発揮してきた。

しかし、注目すべきは、スターリン主義が新しい形態に移行した頃から、このイデオロギーに抗してマルクス主義を革新させようとした人々の運動も活発になってきたことである。そのさい彼らは初期のマルクスと彼の疎外論にもどり、そこから出発してスターリン主義とその土台としてのソ連型社会主義を批判しようと努めた。そこで、これに応戦するためにもスターリン主義の信奉者たちは、マルクスが彼の初期の疎外論を克服したという歌をいよいよ大声で合唱するようになってきたのである。そして、この歌には、



社会主義社会には基本的には疎外が存在する余地がない、疎外が存在するなどと言う者は社会主義を中傷し誹謗しているのだという歌詞が付け加えられていた。注意すべきは、こうしたスターリン主義者たちの合唱にユニークな声を張り上げて参加した人々もいたことである。それは、多少洗練されたスターリン主義を説いてきたフランスのアルチュセールのような構造主義的マルクス主義者たちやその他の諸国における類似した思想の提唱者たちの群であるが、ここには、日本の物象化論の擁護者たちも加えることができるであろう。彼らが参加したことで、スターリン主義者の大合唱がさらに力を大きくしたことは疑いがない。こうして、マルクスの疎外論を巡る争いではスターリン主義者たちの闘いが効を奏して、疎外論を適切に解釈してマルクス主義を発展させようと努め、さらにはそれによって、不様に自滅するまえに社会主義運動の革新をはかろうと試みてきた潮流は敗北し、あちらこちらに細々と生き延びてきているだけになってしまったということであろうか。

残念ながらたしかにその通りであることを、ソフィーにむかってレクチャーしていたアルベルトのマルクスについての議論は例証しているともみなすことができるであろう。アルベルトはマルクスが労働とその疎外について語ったのは、マルクスが本物の共産主義者になる前であったと付け加え、それによって、一八四五年以後のマルクスのところではそうした疎外論がもはや語られなくなってしまったかのような、そしてその後期マルクスのところでは歴史の必然的發展の話が語られていたかのような印象をあたえているのである。このアルベルトがどのような思想的潮流の影響下にあったのかは、もはや改めていうまでもないであろう。すでにソ連型社会主義が自己崩壊を遂げていた時期にヨーロッパの北辺の一知識人が書いたマルクスについての記述のなかに、スターリン主義者たちの議論の痕跡、というよりもそれによる汚染の跡がありありと残されていたのである。そして、このアルベルトが大活躍している本が世界中で翻訳され広められていて、日本でも一二〇万部以上も売られているとすれば、それによってまたスターリン主義者たちによる汚染が大変な規模で拡散させられるということになる。まことにこれは由々しきことではないであろうか。そこで、以下、このスターリン主義による汚染が本当に負の遺産でしかないことを、したがってアルベルトを創作したゴルデルが間違いを犯して、訂正の必要があることをはっきりさせておくことにしたい。

議論を広げて曖昧なものにしてしまわないために、焦点をできるだけ絞って検討を進めて行くことにしよう。問題は、新旧のスターリン主義者たちとその同調者たちの大合唱が歌ってきたように、初期のマルクスの疎外論は結局のところ後期のマルクスによって超克されてしまったのか否かということである。この問題にたいして肯定的に答えてきた人々の見解を疎外論超克説と呼んでおくなら

ば、問題は、要するに、疎外論超克説は正当であるのか否かということである。ところで、この説が正しいとすれば、後期のマルクスはもはや疎外論を説かなかつたことになる、というよりは、そもそもこの説は後期のマルクスが疎外論を説いていないということ为前提にしている。したがって、後期のマルクスが疎外論を説いているとすれば、当然、この前提が崩れてしまい、したがってまた疎外論超克説も間違っているということにならざるをえない。そこで、ここでは、実際に後期のマルクスがまったく誤解の余地の無い仕方でも疎外論を主張していたことをはっきりさせようと試みておくことにしたい。そして、改めていうまでもなく、こうした試みはそれなりの長い歴史をもっていて、すでに大事なことはほとんど為されてきたといってもよい。したがって、ここでは、それらの成果というべきものを利用しつつ、これまで指摘されてこなかったことなども付け加えながら、議論を進めることにしよう。

先にアルベルトが、マルクスが資本主義を賃金奴隷制として把握していたということを説明しているのを見てきたが、後期のマルクスはまさにその点をは明確にし、この奴隷制がその他の奴隷制や農奴制などにたいしてどのような特殊性をもっていたのかをはっきりさせようと努めていたといってもよい。問題は、いったいこの奴隷制、すなわち労働者にたいする資本家の支配の本質はどのようなところにあるのかということである。この問題についてマルクスは、明らかに彼の後期に属する一八六〇年代前半の著作のなかで、彼が若い時にしばしばそうしていたように、宗教的自己疎外を引き合いに出しながら、次のように特徴付けている。

「労働者にたいする資本家の支配は、人間にたいする物象の支配、生きた労働にたいする死んだ労働の支配、生産者にたいする生産物の支配である。なぜなら、実際に労働者にたいする支配の諸手段……となる諸商品は生産過程のたんなる諸結果であり、その過程の諸生産物であるからである。これは、イデオロギーの領域で宗教においてあらわれる関係、すなわち主体の客体への転倒およびその逆の転倒という関係とまったく同じ関係が、物質的生産において、現実の社会的過程——というのは、それが生産過程であるのだから——においてあらわれているのである。」<sup>(4)</sup>

マルクスが労働者にたいする資本家の支配、賃金奴隷制の本質をどのようにとらえていたかが、明確に示されているが、このような文章を読めば誰しも、まさに資本主義の本質を規定するというもっとも重要な問題を論じている箇所が初期の疎外概念を維持していたことを認めざるをえない。しかも、実際にマルクスは、この箇所が続いて、ここで描き出されている過程を労働者自身の労

働の「疎外過程」と呼んでいる。このような用語の使い方が彼の初期の労働疎外論のなかに登場してくるものと基本的にはまったく同一であることは明瞭であって、ここからまた誰もが、後期のマルクスが彼の初期の疎外論を維持していただけではなく、「疎外」という用語さえもそのまま存続させていたことを認めざるをえないのである。

このように疎外概念が登場してくる箇所は後期マルクスの諸著作にはいくらでも見出だすことができるが、さしあたってここでは、後期マルクスが数多く残している同様な文章のなかからもう一つの代表的なケースだけを挙げるにとどめておきたい。その初期におけると同様にその後期においてもマルクスは、資本主義的生産様式における労働者と生産諸手段との関係に絶えず注意をうながしているが、この関係について「労働者が生産諸手段を使用するのではなく、生産諸手段が労働者を使用する」ということになっていることを、さらに、まさにこのような転倒によって生産諸手段が資本になるということを指摘したのちに、次のように述べている。

「労働者が生産諸手段にとっての手段なのであって、一面では生産諸手段の価値を保存するための、他面では、それらの価値を増殖させ、すなわち増大させ、剰余労働を吸収するための、手段なのである。すでにこの関係はその単純性において一つの転倒、すなわち物象の人格化および人格の物象化である。というのは、この形態を以前のすべての形態から区別するのは、資本家がなんらかの人格的性質において労働者を支配するのではなく、ただ彼が『資本』であるかぎりにおいてだけ労働者を支配するということだからである。資本家の支配は、生きた労働にたいする対象化された労働の支配に他ならず、労働者自身にたいする労働者の生産物の支配に他ならない。」<sup>(5)</sup>

「資本家の支配は、生きた労働にたいする対象化された労働の支配に他ならず、労働者自身にたいする労働者の生産物の支配に他ならない。」たしかにここでマルクスは「疎外」は使っているわけではないが、しかし、資本家の支配の本質を規定するさいに彼が考えていたのがまさに彼の初期以来の疎外概念であったことは、疑問の余地がまったくないほど明瞭である。したがって、この箇所もまた、後期のマルクスが彼の初期の疎外概念を放棄することなく存続させていたことを、そしてこの概念をまさに資本主義的生産様式の本質を規定するさいのキー・コンセプトとして使っていたことを示している。

さて、後期のマルクスが疎外論を超越したという説がいかに間違っているかをはっきりさせることが目的であるとすれば、すでに

以上で十分にその目的は果たされたと考えてもよいであろう。僅かに二つの例をあげただけであるが、いずれもまさに後期マルクスの思想が端的に表明されている典型的な例とみなされるものであった。それらの例がきわめて明確に、誤解の余地などがないような仕方では証言していたのは、要するに、マルクスが疎外論をその後期においては放棄してしまったと主張してきた新旧のスターリン主義者たちやそのさまざまな種類の同調者たちすべてがまったく間違った説を唱えてきたということである。これはまことに興味深い現象だといってもよいであろう。彼らは、イデオロギーというものがどのような働きをするものであるかということの生きた見本を提供してきたのである。彼らは、雨が降っているはずだと考えて、しかもそれが強い確信になってしまっているので、空がからりと晴れ渡っているのに、雨が降っていると大声で叫んできたようなものである。さらに驚くべきは、そのような彼らのなかには、雨が降っていないことを親切に教えた者にたいして、目くじらをたてて反論し、それがうまく行かないと、天に向かって自分の唾を吐いて、雨が降っていると大騒ぎしてきたものもいることであろう。<sup>(6)</sup>

先に検討してきたように、『ソフィーの世界』の著者は、いわゆるマルクス主義者や共産主義者にたいして反発を感じつつも、結局、彼らの影響から抜け出ることができず、マルクスが労働とその疎外の問題を論じたのは「共産主義者になる前の若い頃」であったとみなしていた。しかし、もはや改めて指摘するまでもないが、彼もまたマルクスについて間違った見解を抱いているのである。ゴルデルの言い回しを生かして、正しく表現し直すならば、次のようにいわなければならない。すなわち、「共産主義者になった若い頃、マルクスは、働く人間に何が起こっているのか、ということに興味をもったが、彼はその後の生涯を通じてその興味を抱き続けた。」ゴルデルは、新版を出すときには、アルベルトに間違いを認めさせ、彼の主張を訂正させるべきなのである。

ところで、以上で明らかになったのは、一方では、マルクス主義の歴史のなかで猛威をふるってきた、そして『ソフィーの世界』までも汚染してきた疎外論超克説が完全に間違っていたということであるが、他方では、それとは反対の見解、すなわちマルクスがその後期においても疎外論を維持し発展させていたという見解が正しかったということである。実は、当然のことながら、この後者の見解の支持者は、スターリン時代に幕が引かれてから、徐々に増えてきていて、一時期、思想としてはきわめて偏頗な構造主義が流行した時には減少したことがあったとしても、その後は増加の一途を辿ってきているとみて間違いない。したがって、今では少なからぬ人々が、後期のマルクスにおいても疎外論が維持されていたことを認めているのであるが、そしてこれはマルクス主義の歴史における進歩とみなされるべきであると思われるが、しかしそれにもかかわらず、今日にいたるまでそれらの人々たちによっても必ず

しも適切には把握されてこなかっただけでなく、しばしばほとんど注目されてもこなかったマルクス疎外論の根本問題が存在する。そこで、次にこの点についてだけ簡単に触れておくことにしたい。

三

ここで引用してきた後期マルクスの二つのパラグラフにもう一度目を向けてみよう。先ず最初のパラグラフのなかで彼は、資本主義的生産様式における労働者と労働生産物、人間と物象との関係について、主体の客体への転倒およびその逆の転倒というイデオロギーの領域で宗教において現れるのとまったく同一の関係が生じていると主張していた。マルクスが労働疎外を主体と客体の転倒という言葉で言い換えているだけなので、彼の主張は一見たんに資本主義的生産様式における基本的な事実を指摘しているにすぎないようにみえる。したがって、そのように受け取った読者も多かったのではないか。しかし、ここでマルクスが主体の客体への転倒とその逆の転倒について語りながら、そのモデルとして宗教をあげていることに注目すべきであろう。マルクスが批判の見本のごときものとみなしていたフォイエルバッハの宗教批判も、それを批判的に継承した彼自身の宗教批判も、人間と、人間が彼の自己意識をプロジェクトして創造した神との関係が転倒して、神が主体になり人間が客体になりさがってしまっている状態を悲惨な状態とみなし、その状態の克服を訴えたのである。したがって、資本主義的生産様式においては労働者と彼の労働生産物の関係が宗教における転倒と同様に主客転倒しているというマルクスの主張も、たんに事実を記述しているのではなく、資本主義的生産様式において労働者と彼自身の労働生産物との関係が転倒していて、労働者が悲惨な状態に置かれていることを批判し告発しているのである。

そして、注目すべきは、さらにマルクスが第二のパラグラフのなかで労働者の方が生産諸手段すなわち物象的労働諸条件にとっての手段になっていることを強調していることである。彼はこれを一つの転倒であると述べて、その自身を「物象の人格化および人格の物象化」と特徴付けている。引用した文章をよく読めば明らかのように、こうした言葉でマルクスが言い表しているのは、生産諸手段という物の方が労働者という人を手段にしている、つまりは前者の物の方が目的になり、後者の人の方が手段になってしまっていることにほかならない。人間が手段化されるということがマルクスにおいてどのような意味をもっていたかについては多言を要しないであろう。カントとドイツ観念論の哲学者たちによって築かれた伝統のなかでものを考えてきた者にとって、それはまさに人間

の尊厳が奪われることにはかならなかったのである。

要するに、二つのパラダイムから知られるのは、マルクスが、労働が疎外されているということは人間が客体化され、人間が手段化されることであり、人間が悲惨な状態におかれ、人間としての尊厳を奪われることにかならないとみなしていたということである。明らかに、疎外概念によってマルクスは資本主義的生産様式の諸事実や諸関係をたんに記述してはならず、それらを批判し告発していたのである。だが、そもそもマルクスにおいてこうした批判や告発はどのようにして可能になっていったのか。ここまです議論が進んでくれば、もはや改めて指摘するまでもないが、こうした批判は、マルクスが、人間が主体として、目的としてふるまうときに、人間として適切な状態を獲得し、人間としての尊厳を確保することができると考えていたからこそ初めて可能になったのである。こうした前提がなかったとすれば、批判も告発もなされなかったことは疑いがない。そして、人間が主体として、目的としてふるまうということは、人間が自由であり、自律性を確保している場合にはじめて可能になる。したがって、マルクスは、そもそも前提として人間が自由であるべきでないと考えていたのであり、こうした主張と関連させて、人間が客体ではなく主体として、手段ではなく目的そのものとして扱われるべきでないと考えていたのだとみなすことができるであろう。

ところで、ここでマルクスにおけるそれらの存在がはっきりしてきた人間の概念、つまり自由な人間、主体としての人間、目的としての人間などの概念は、人間が過去において何であったか、また現在何であるかに答える概念、つまり人間についての記述的概念ではなく、人間がいかにあるべきかに答える概念、人間についての規範的概念である。これらの概念は相互に還元することができないものであるが、しかし、マルクスもまた可能性や能力と結び付かない当為を笑うべきものとみなしていたので、人間についての規範的概念が、人間についての記述的概念にもとづく予測に合致していることが、つまりそれが現実において可能な人間の概念の一つでもあることが不可欠であると考えていた。したがって、マルクスもまたエンゲルスと同様に社会にかんする科学的知識の価値を強調したが、しかし彼の友人とは違って、この知識には還元されえない規範的概念を存続させていた。この概念についてマルクスがどの程度自覚的に論じていたかはともかくとして、まさにそのおかげで彼が、労働者が労働生産物によって支配される資本主義的生産様式を批判し告発することができたことは明瞭である。

さらに、以上との関連で注目しておかなければならないのは、マルクスにおいて人間にかんする規範的概念がたんに資本主義的生産様式における根本的な諸限界に光をあてる働きをしていただけではなく、またこの生産様式が支配的な社会を超える未来の社会の

理想においても決定的な働きをしていたことである。マルクスは、その初期においてこの未来の理想を疎外された労働の産物としての私的所有の止揚としての共産主義として描き出していたことは、良く知られている。この理想は、疎外論が維持されていた以上当然のことであるが、その後期においても維持され発展させられていて、さまざまな機会に語られている。マルクスの未来社会論は、最初の低次の共産主義を経てより高次の共産主義へと発展していくシナリオをふくんでいて、通常考えられているよりもはるかに興味深いものであるが、そこでキー・コンセプトとして登場させられているのは、「自由な人間の連合」、「必然性の国」の彼方の「真の自由の国」等々における「自由」であり、さらにこの国における「自己目的として認められる人間的な力の発展」などなのである。これらの用語はいずれも『資本論』のなかに見出だされるものであるが、それらの意味が規範的な性格のものであることは、改めて指摘するまでもないであろう。マルクスの疎外論的な資本主義批判が規範的諸概念なしにはありえなかったように、彼の共産主義的な未来社会論も規範的諸概念なしにはありえなかったのである。

これまでマルクス主義者たちやマルクス研究者たちは伝統的マルクス主義——それは幻想を否認して実証的知識の価値を強調してきただけではなく、さらに進んで幻想を否認するとともに理想までも否認してきた——やそれをカリカチュア化したスターリン主義の影響下で、規範的概念を排除した実証主義の観点に立っていたために、習慣的にマルクスまでも実証主義者に仕立て上げてきた。このような実証主義者は、規範にもとづいた理想を掲げて社会変革を訴えることができないので、どうしても資本主義の自動的な崩壊や歴史の必然的発展の産物としての社会主義などというものを導入してこざるをえない。先に見てきたように、『ソフィーの世界』の哲学者アルベルトもマルクスについて語りつつ、マルクスが資本主義を「自滅の経済システム」だなどとみなしていたかのように論じていたが、これはこの本の著者もマルクスを実証主義者として理解していることを示しているとみてもよい。それにたいして、今ここで検討してきたように、実際のマルクスは、人間についての規範的な概念を前提にして資本主義を批判し、さらにはそれらの概念を前提にして彼の共産主義的な未来社会論を考えていたのである。彼がその後期においても、そうした規範的概念とそれにもづく批判的意識が資本主義の変革においてもいかに重要であると考えていたかは、彼の諸著作のさまざまな箇所から知られるが、その代表例はつぎのものであろう。彼は、ここで引用してきた彼の後期の経済学草稿のなかで次のように述べている。

「資本主義的生産においては」労働能力「の担い手としての労働者」は生きた労働にたいして疎遠なもの、強制労働としてふ

るまう。それ自身の労働は労働能力にとっては疎遠なものなのであり、——そしてそれは、資本主義的生産においてはその内容、その監督、その社会的な形式からしてそう見られるところのものなのである——それは材料や道具が疎遠であるのとまったく同じなのである。それゆえに、労働能力にとっては生産物もまた疎遠な諸材料、疎遠な諸道具および疎遠な諸労働のコンビネーションとして——疎遠な所有「疎遠な財産」として——現れるのであり、労働能力は生産の後には支出された生命力に応じてそれだけ一層貧しくなり、したがって苦役が改めて、労働諸条件によって雇用される労働能力として始まるのである。生産物を労働能力「の担い手としての労働者」自身のものであると認識すること、そしてその実現の諸条件からの分離を不正なこと [einse Unrechts]——強制関係——であると評価することは、法外な意識であり、それ自身が資本主義的生産様式の産物であり、またその滅亡に向かう凶兆でもあるが、それはちょうど、自分が第三者の所有ではありえないという奴隷の意識とともに、奴隷制はなお引き続き辛うじて生き延びただけで、生産の土台として存続することができなくなってしまったのと同じである。」

前半にはマルクスが、資本主義的生産様式を総体として批判的にとらえるうえで疎外概念がいかに重要であるとみなしていたかが再び示されていて興味深い。しかし、さしあたってここで注目すべきは、後半で彼が、資本主義の変革においても、労働者が労働疎外を克服することが大事であり、労働が疎外されていることを「不正なこと」、人間にとって不適切であると認めることが、決定的に重要であることを強調していることである。「不正なこと」、不適切なことについての意識は、人間についての規範的諸概念が前提されてはじめて形成される批判的意識である。したがって、ここでマルクスは資本主義崩壊にはそうした規範的諸概念の発展とそれらにもとづく批判的意識の発展が不可欠であることを主張しているのである。ちなみに、マルクスは、先に引用した「労働の疎外過程」についての議論の続きで、労働者がそうした批判的意識を獲得することが相対的に容易であることを指摘し、その理由として、労働者の方が「最初から資本家よりも高いところに立っている」ことを強調している。彼の考えでは、資本家の方が「その疎外過程に根を張り、そこに彼の絶対的な満足を見出だす」のにたいして、労働者の方は「資本家の犠牲として最初から反逆的な関係に立っていて、その過程を奴隷化過程として感じている」のである。これが、初期のマルクスが『独仏年誌』誌上の論文や『聖家族』などで主張していたことの延長線上の議論であることは、改めて指摘するまでもないであろう。

伝統的なマルクス主義をいっそう極端化したスターリン主義もそのさまざまな変種も、そもそもからマルクスの疎外論を理解せず



徹底的に排除しようと努めてきた。したがって、当然、この理論に含まれていた規範的諸概念や、労働者がそうした諸概念にもとづいて批判的意識をもつことの重要性についての主張を理解できるわけもなかったのである。（この点は、例えば、フランスのアルチュセールの『マルクスのために』〔邦訳『甦るマルクス』〕を参照せよ。読者はただちにこの本の真実の題名は『マルクスに反対して』であり『マルクスを葬る』であったことに気付くであろう。）さらに、スターリンの権威失墜後、マルクスにまで戻り、疎外論の価値を認めるところまで来た人々の大部分も、今日にいたるまで、ここでマルクスが資本主義の凶兆になる「法外な意識」と呼んでいる批判的意識について理解するところまでは進むことができなかった。エンゲルスと伝統的マルクス主義に由来する、そして、スターリン主義のところまでいっそう極端なものにされた、たんなる空想とともに理想までも否認してきたあからさまな実証主義がもたらした被害はすさまじいものであり、おそらくその被害総額は想像を絶しているが、その被害の及ぶ範囲から出られなかった人々は、結局、マルクスの疎外論にふくまれていた規範的諸前提を理解することができなかつたとみなしてもよいであろう。すでに指摘してきたように、『ソフィーの世界』の著者もまた、残念ながら、そのような人々のなかの一人であったのである。

## おわりに

さて、これまでにみてきたところから明らかのように、マルクスは、ゴルデルが的確に言い表していた問題、すなわち「働く人間に何がおこっているのか」という問題に、たんにその初期においてだけではなく、その後期においても関心をもち、この問題をはっきりさせようと大変な努力を積み重ねていた。そして、その成果が、『資本論』に代表されるような彼の経済学的諸著作であった。チョコレート工場で働いているソフィーの叔母は、万感をこめて「うんざりしている」と彼女に語っていたが、マルクスはそうした叔母の状態を悲惨な状態だと考えて、そうした状態が何故生じたのかを考えたのだといってもよいであろう。この問題にたいするマルクスの解答は、要するに、資本主義的生産様式においては働く人間が疎外されている、つまり客体化させられ手段化させられていて、人間としての尊厳を奪われざるをえないのだということであった。こうした批判にもとづいてマルクスは、働いている人たちが、彼らが疎外されていて、不適切な状態におかれていることまさに不正なことであると認め、そのような生産様式を変革することができるといえることが大事なことであるということをお話したのである。このようなマルクスの批判的で革命的な思想が伝統的マルク

ス主義によって理解されてこなかったのは、ある程度やむをえなかったとしても、一九三〇年前後に『経済学・哲学草稿』その他のマルクスの諸著作が発表されてからは、それが理解されるための通路は十分に広げられたとみなすことができる。しかし、この通路は通行が禁止され、現実には伝統的なマルクス主義の方がスターリン主義においていつそう極端な仕方で発展させられてきて、新たに見出だされたマルクスの思想の方が排斥されてきた。そして、それだけではなく、疎外論を中心とするマルクスの思想は後期マルクスによって放棄されたという神話が創られ広められてきた。その結果、最近になって発表された『ソフィーの世界』のような本はなかにまでそうした神話がまだ顔をのぞかせていて、スターリン主義による汚染との闘いがヨーロッパの知識人のなかでも依然として大きな課題であることが示されていたのである。幸いというべきか、一九八九年の秋のベルリンの壁の崩壊後、東欧およびソ連の社会主義システムが音を立てて自己崩壊を遂げ、それまでそれらの諸国で公認のイデオロギーとして支配的な影響力を保持してきたスターリン亡き後のスターリン主義、いわゆる新スターリン主義も脇に投げ捨てられてきた。そこで、そうしたことの結果として、今日、疎外論をふくむ本来のマルクスの思想を復権させ、さらには発展させるための道がきれいに片付けられたのだとみることもできるであろう。こうした可能性は、マルクスの旗のもとに展開されてきた運動が残した負の遺産があまりにも大きいために、実際には非常に小さいものでしかないかもしれない。しかし、ソ連型社会主義の崩壊後僅かに数年しか経っていないにもかかわらず、とりわけ先進資本主義諸国では、資本主義は所詮資本主義という意識が強まってきていて、「働く人間に何が起きているか」という問題がクローズアップされてきている。もしその通りであるとすれば、まだ歴史上一度も晴れの舞台に登場したことがなかったマルクスの革命思想にもその本格的な出番が回ってくるのが期待できるのではないか。

## 注

- (1) ヨースタイン・ゴルデル『ソフィーの世界——哲学者からの不思議な手紙』須田 朗、池田香代子訳、NHK出版、五〇七ページ
- (2) 同右、五〇九ページ
- (3) 同右、五〇六ページ
- (4) マルクス『直接的生産過程の諸結果』岡崎次郎訳、国民文庫、三二二ページ参照。MEGA, II-4-1, S. 64-65
- (5) マルクス『資本論草稿集』、大月書店、第九巻、四一—二二二ページ参照。MEGA, II-3-6, S. 2161.
- (6) 今から二〇数年前に筆者は、日本の一研究者をこの問題で親切に批判したことがある。その結果、帰ってきたのは詳細な反批判であったが、

これはまさに「天に向かって唾する」の代表的なケースになるように思われる。広松渉『ドイツ・イデオロギー』と自己「疎外論の超克」、『広松渉コレクション』第三巻所収、情況出版。そもそも『ドイツ・イデオロギー』における疎外論の超克などということはありえなかった  
のであり、著者は何が何でも無理を通して道理を引っ込ませようと試みたのである。

(7) 前掲『資本論草稿集』第九巻、五九八ページ参照。MEGA, II-3-6, S. 2287